

本態性振戦(重症)に関する研究

研究分担者 古和 久典（独）国立病院機構松江医療センター診療部長

研究要旨

本態性振戦の中で稀少頻度と推定される「本態性振戦（重症）」の診療の質を高め、診療ガイドラインを作成することを目的とした。住民調査では、60歳以上における本態性振戦の有病率は約2%で、その半数以上で家族歴が認められた。医師への調査では、「振戦のために、就労や日常生活に著しい障害を受けている」難治症例の存在が示唆された。本態性振戦に対する治療状況は十分満足できるとは言えず、現在ガイドライン作成に取り組んでいる。

A．研究目的

本態性振戦は、姿勢時や動作時に手指や体の震えを呈することを特徴とするが、同様の震えを呈する疾患は多岐に渡るため、一般医で適切に診断されていることは多くない。本研究では、診療指針の改定版となる「本態性振戦診療ガイドライン」の作成を進めている。

B．研究方法

平成30年度に実施した有病率等の疫学調査の調査方法の信頼性を評価するため、追加調査を実施した。診療ガイドラインの作成にあたり、GRADEシステムを取り入れたMinds2017に準拠することとした。（倫理面への配慮）患者の負担や苦痛とならないようにした。

C．研究結果

神経変性疾患領域における調査研究班 平成31年度ワークショップ（令和元年7月19日開催）において、クリニカル・クエスチョン案を発表し了承を得た。各分担担当者を決めて、了承を得た。

D．考察

昨年度の調査により、本態性振戦の有病率は約2%で、その半数以上で家族歴が認められた。また、ある一定の頻度で「振戦のために、就労や日常生活に著しい障害を受けている」難治症例を医師が経験していることが明らかとなった。診療ガイドラインを作成し、本態性振戦、および本態性振戦（重症）の診断基準を整備することにより、現状では十分な治療効果が得られず社会的不利な立場にある本態性振戦（重症）の頻度や病像をより詳細に明らかにしていく必要がある。

E．結論

本態性振戦に対する治療状況は十分満足できるとは言えず、現在ガイドライン作成に取り組んで

いる。

G．研究発表

1. 論文発表 なし
2. GAKKAIHAPPYYOU

古和久典，深田育代，中島健二：本態性振戦の治療に関する全国アンケート調査結果報告（第37回日本神経治療学会総会。2019年11月，東京）

H．知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし